

BUCKLE UP!!

シートベルトを締めましょう!!

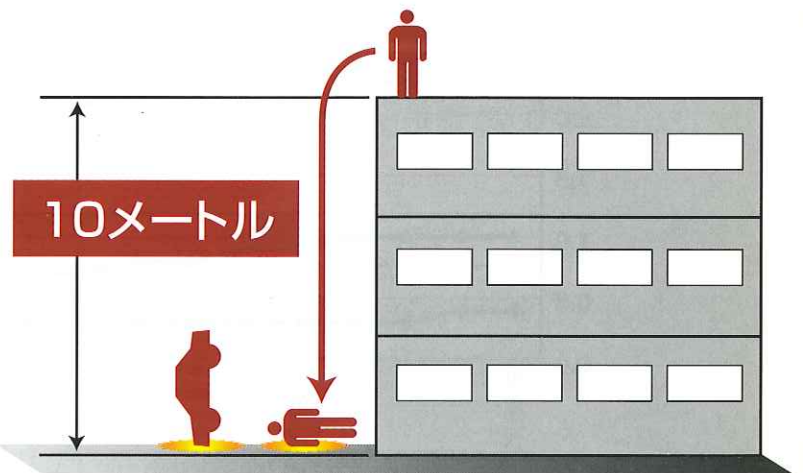
シートベルトをしていないと!

シートベルトの着用率はだんだん高くなってきていますが、今でもときどき、シートベルトを着用しない人を見かけます。

シートベルト装置は衝撃を感知すると、ベルトをロックして乗員の動きを止めようとします。

例えば、時速50キロメートルで走る自動車が衝突した時の衝撃は、10メートルの高さ(三階建てのビルの屋上)から落下した時の衝撃とほぼ同じです。

車が衝突したとき、中に乗っている乗員がシートベルトを着用していないと、瞬間的に大きな力で飛ばされて車内の部品に身体を打ちつけたり、車の外に放り出されたりして大きなケガをします。



シートベルトを「している」か「していないか」の違いは?

交通事故で「亡くなったり負傷された方」全体の中で、亡くなった方の割合を表したものを「致死率」といいます。

財団法人交通事故総合分析センターは、交通事故と「人間」「道路」「車両」について、科学的・総合的な調査・分析や研究をおこなって交通事故の防止と被害の軽減を図り、快適な道路交通環境の実現に寄与することを目的に設立されました。

つくば市には交通事故総合分析センターの「交通事故調査事務所」があります。つくば事務所では、実際の事故現場で事故の状況を調査していますが、この事故調査は交通事故の低減を目的とした調査・研究のためのもので、警察の捜査や保険会社の調査とは全く別のものです。



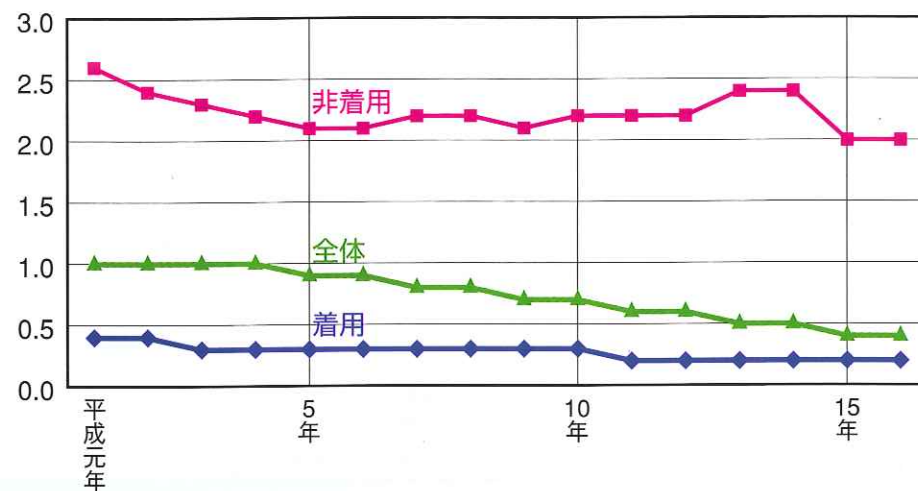
調査中の事故調査員

交通事故調査への ご協力をお願いいたします。

シートベルトをしていないと10倍死に至りやすい!

下のグラフは「シートベルトを着用していた」か「着用していなかった」かに分けて平成元年(1989年)から平成16年(2004年)までの16年間の致死率の推移を表したものです。全体としての致死率は下がる傾向にありますが、「シートベルト着用」と「シートベルト非着用」の致死率には大きな差があるのがわかります。致死率は年によって変化しますが、シートベルトを着用していた乗員の場合の致死率は0.2~0.3

%ですので、受傷者1,000人に対して2~3人の方が死亡していることになります。一方、シートベルトを着用していなかった乗員の場合の致死率は2.1~2.4%ですので、受傷者1,000人に対して21~24人が死亡していることになります。つまり『シートベルトをしていないと10倍死亡に至りやすい』ということになります。



シートベルト着用状況を全国規模で調査しました

警察庁と(社)日本自動車連盟(JAF)は、平成16年10月に全国の一般道路と高速自動車道等で「シートベルト着用状況調査」を実施しました。その結果、運転者のシートベルト着用率は、一般自動車道で90.7%、高速自動車道等では97.3%でした。一方、前席同乗者の着用率は一

般自動車道で78.5%、高速自動車道等では91.3%と、いずれも運転者の着用率よりも低くなっています。また、後席同乗者の着用率は一般自動車道で7.5%、高速自動車道等では11.5%と、前席乗員との差は大きいものがあります。

	一般道			高速道		
	平成14年	平成15年	平成16年	平成14年	平成15年	平成16年
運転者	89.4%	89.4%	90.7%	97.1%	97.4%	97.3%
前席同乗者	75.2%	75.5%	78.5%	90.6%	91.4%	91.3%
後席同乗者	6.7%	6.9%	7.5%	9.3%	11.0%	11.5%

シートベルトは自分のためだけではありません!

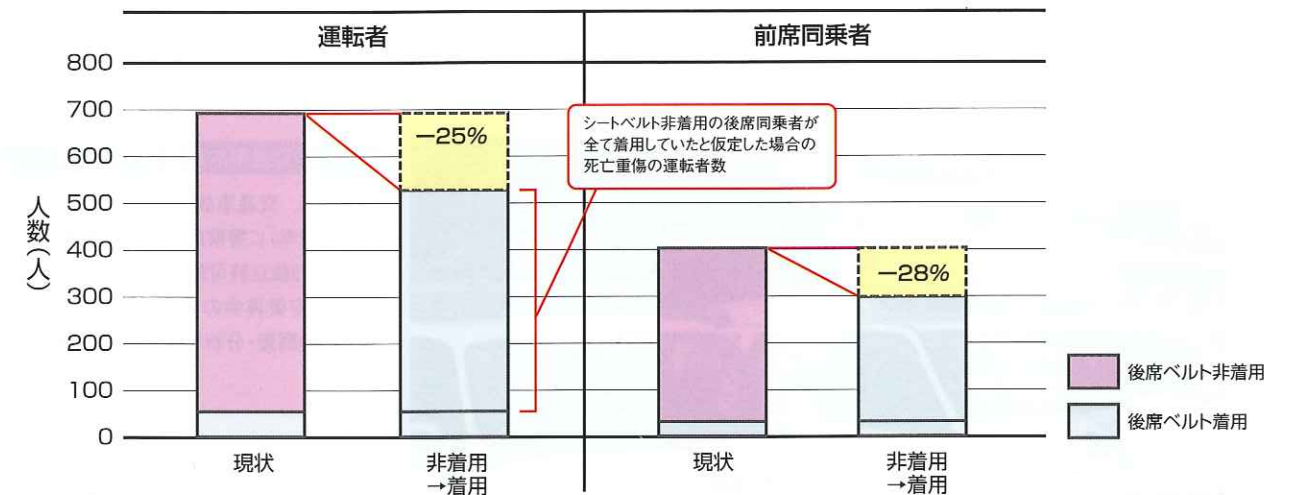
後席の乗員であってもシートベルトを着用していないと、衝突の衝撃で飛ばされ重いケガを負うことがあります。また、正面衝突のような事故の場合には、飛ばされた後席の乗員が前にある運転席や助手席などに身体ごとぶつかったため、運転者や助手席乗員のケガが重くなったのではないかと考えら

るケースがありました。交通事故総合分析センターの交通事故データの中から「乗員全員が負傷し、かつ後席に乗員が乗っていた事故」だけを取りだして、後席に乗っている乗員がシートベルトを着用していたならば死傷者数がどのように変化するか予測してみました。

後部座席の人がシートベルトを着用すると、前席の人も守れる

後部座席の乗員がシートベルトを着用していたとしても、クルマのぶつかり方によっては運転者や助手席の同乗者が重大な傷害を受けることはあります。

ところが、後部の座席の乗員がシートベルトを着用すると、死亡重傷者数は運転者の場合25%、助手席に座っている同乗者については28%低減させることができると予測できました。



後席乗員がシートベルトを着用することにより予測される前席乗員の死亡重傷者数
(1995~2000年の合計、ボンネット型普通乗用車による分析 イタルダ・インフォメーションNo42より)

シートベルトの効果は明らかです!

車両の前面が衝突するような事故の場合、最も効果的に乗員を拘束できるのがシートベルトです。シートベルト着用で死亡・重傷となる人の数は約半分になるという報告もあります。事故はおこしたくておこすものではありません。しかし、「もしもぶつかったら」のときのために、クルマに乗るときは、面倒がらずにシートベルトを締めてください。





交通事故調査への

ご協力をお願いいたします。

死者は減少していますが・・・

日本の交通事故による死者数は昭和45年(1970年)の16,765人がピークでした。その後、様々な交通安全対策の実施によって昭和54年(1979年)には8,466人にまで減少しました。

ところが、昭和63年(1988年)には再び10,000人を超え「第2次交通戦争」といわれる状況になりました。関係各分野の努力によって平成8年(1996年)以降、死者は再び10,000人を下回り、平成16年には7,358人まで減少しました。

しかし、右の表でおわかりのように、発生件数および死傷者数は引き続き増加しています。

交通事故の発生件数、死傷者数、死者数

	発生件数	死傷者数	死者数
平成 元年	661,363	814,832	11,086
2年	643,097	790,295	11,227
3年	662,383	810,245	11,105
4年	695,345	844,003	11,451
5年	724,675	878,633	10,942
6年	729,457	881,723	10,649
7年	761,789	922,677	10,679
8年	771,084	942,203	9,942
9年	780,399	958,925	9,640
10年	803,878	990,675	9,211
11年	850,363	1,050,397	9,006
12年	931,934	1,155,697	9,066
13年	947,169	1,180,955	8,747
14年	936,721	1,167,855	8,326
15年	947,993	1,181,431	7,702
16年	951,371	1,181,585	7,358



交通事故総合分析センターの調査車両は緊急自動車に指定されています

交通事故総合分析センター

財団法人 交通事故総合分析センターは、平成4年(1992年)に警察庁、運輸省(当時)、建設省(当時)からの設立許可を受け設立された日本で唯一、国家公安委員会の指定をうけた交通事故低減のための調査・分析を行っている機関です。

お問合せ先

(財)交通事故総合分析センター

ホームページ <http://www.itarda.or.jp>
Eメール koho@itarda.or.jp

つくば交通事故調査事務所

〒305-0831 茨城県つくば市西大橋字大窪647 (日本自動車研究所内)
TEL029-855-9021 FAX029-855-9131

事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町6-6 麹町東急ビル5階
TEL03-3515-2525 FAX03-3515-2519